授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2285 号

Utility of weekly docetaxel combined with preoperative radiotherapy for locally advanced esophageal cancer from pathological analysis

(病理解析から見た局所進行食道癌に対するウィークリードセタキセル併用術前放射線化学療法の有用性)

櫛田　知志（くしだ　ともゆき）

博士（医学）

論文内容の要旨

胸部食道癌は悪性度が高く、さまざまな集学的治療法の開発が行なわれている。局所制御に優れた術前化学放射線療法（以下 CRT）は近年急速に普及し、その有用性も報告されている。今回我々は食道癌に対する TXT 併用 CRT の治療成績を報告する。2001 年～2007 年に遠隔臓器への転移を認めず、術前 CRT を行った手術症例 95 例を対象とした。FP 群 40 例、TXT 群 55 例であった。
両群間で切除標本における病理学的奏効度と長期予後を比較した。予後の検討は Grade 別、Stage 別にも行なった。また予後因子の多変量解析もロジスティック回帰分析で行なった。両群間で臨床病理学的因子について統計学的に有意差はなかった。術後主病変の病理判定では FP 群の方が有意に治療効果ありと判定された。一方累積生存率の検討では TXT 群が FP 群に比べ有意に予後良好であった。病理学的な Grade 別の累積生存期間は Grade1 症例で TXT 群はFP群に比べ有意に予後良好であった。術後病期別に累積生存期間ではStageⅣ症例でTXT 群が FP 群に比べ有意に予後良好であった。また従属変数を生死とし、共変量は臨床病理学的因子とし、ロジスティック回帰分析を行なった結果、リンパ節転移 5 個以上の有無のみ有意差をもって予後因子として選択された。リンパ節転移の有無、リンパ節転移 5 個以上の有無について、累積生存期間を比較するとリンパ節転移のある症例で TXT 群の予後が良好であった。病理学的奏効度の検討では CRT の短期的局所効果は FP 群が TXT 群よりも優れていたが、長期的予後は逆に TXT 群で良好であり、CRT 後に手術を行なう場合には TXT 併用 CRT は許容されると考えられる。食道癌の予後規定因子としてリンパ節転移は重要な因子でありこれを FP 群と TXT 群間で累積生存率を検討した結果から TXT 併用 CRT はリンパ節転移に対して FP 群よりも効果があることが推察された。